

解答は別紙の解答欄に記入しなさい。

I 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

「百獣の王」ライオンは、力強さの象徴として世界中で認められている。実際、大きなオスだと体重は250キロに達するとされ、みごとにたてがみを震わせ、鋭い牙を見せながらうなる姿には迫力がある。フランスのラスコー洞窟では、すでに後期（ A ）時代の壁画にライオンが認められ、古来より人々がライオンの姿に強い印象を受けていたことを表している。

ライオンが生息していなかった地域でも、ライオンは権威の象徴、守護獣の代表としてしばしば用いられている。たとえば日本では、狩野永徳のふすま絵や日光東照宮の「唐獅子」がよく知られている。また、寺社仏閣の正面に見られる「狛犬」も獅子と並べられたり混同されたりしていることが多い。元来ライオン像はインドから中国経由で伝えられたものと考えられており、「獅子」という言葉もサンスクリット語の「シンハ」（ライオンの意味）に由来するものとされている。

ライオンが権威、とりわけ王権の象徴として用いられた例を歴史的に遡ると、古代メソポタミアのシュメール文化に到達する。その代表的叙事詩の主人公で、シュメールの都市ウルクの王であったとされる（ B ）は、片手に武器、もう片方の手にライオンを持った姿で表現されることが多い。獅子の圧倒的な強さゆえに、それを退治する者は地上世界のすべての力を支配する者とされたのである。同様の考えはその後も継承され、前一千年紀の新アッシリアの王たちも自らの権威を示すためにライオン狩りを行い、勇猛な姿を宮殿の浮き彫り壁画に描かせている。ニネヴェの宮殿から出土し、現在大英博物館に展示されているアッシュルバニパルの壁画はその代表である。エジプトのアメンヘテプⅡ世も、即位後に百頭以上のライオンを殺したとされている。このような獅子の象徴は、古くから西方に伝えられ、ギリシア神話の英雄（ C ）もライオン狩りを行ったとされ、ライオンの頭を兜にし、その毛皮を身にまとった姿で表現される。マケドニアのアレクサンドロス大王も、自分を（ C ）と同一視し、ライオンの兜をかぶった姿をコインに刻ませている。

メソポタミアの代表的な戦いの女神イシュタルは、ライオンの上に立つ姿で描かれ、王権の確立としばしば結びついてきた。この女神は、フェニキアやイスラエルではアナト女神やアスタルテ女神と関連づけられ、カデシュでヒッタイトと戦ったエジプト王（ D ）もその庇護を求めたことが知られている。巨人ゴリアテと戦い、イスラエル統一王国を樹立した（ E ）も、羊飼いとて獅子たちから羊の群れを守ってきたことを誇っている。この伝統は新約聖書にも引き継がれ、イエス・キリストは神の平和を確立する勝利者・支配者として「ユダの獅子」（『ヨハネの黙示録』5章5節）と呼ばれている。

ライオンは、王宮や神殿の門の守護獣としても用いられてきた。たとえば、紀元前二千年紀のヒッタイト王国の首都（ F ）の城門の門柱にはライオンが彫られており、ミケーネのアクロポリスの

入り口にも獅子が向かい合う像が彫刻されている。バビロンの大行列道路のイシュタル門には、ライオンを始めとして四種類の霊獣が彩釉レンガで描かれており、アケメネス朝ペルシアの古くからの行政中心地（ G ）の宮殿の壁にも、行進するライオン像が同じく彩釉レンガで表されていた。

門を守る守護獣は、ライオンの身体と人間の顔を組み合わせたスフィンクスの形を取ることもあった。エジプトの（ H ）にあるカフラー王のピラミッドの参道を守るものやヒッタイトのアラジャホユック遺跡の神殿入口のものが有名である。スフィンクスにさらに鷲の翼を加えた想像上の動物もよく知られている。アッシリアではこれらはラマッスと呼ばれ、その石製巨像が宮殿の入り口の両側に立っていた。同様の動物はフェニキアの象牙細工にも見られ、聖書でエデンの園や契約の箱を守る役割が与えられているケルビムもよく似た存在だったと考えられている。

こうした王宮や聖所を守るライオンという概念は、インドにももたらされた。仏教を熱心に取り入れた（ I ）朝のアショーカ王は、四方位を見守るライオン像のついた円柱をサルナートなど各地に立てたことが知られている。また、ヘレニズム文化の影響を受けたガンダーラ美術では、しばしば仏陀座像を支える動物としてライオンが描かれるようになった。ヒンドゥー教の『ヴェーダ』においても、ライオンはその吠え声で侵入者に警告を発し、不信心者を懲らすものとされており、（ J ）石窟寺院群の第16窟ではシヴァ神の本殿を守る動物としてライオンが彫られている。シヴァ神の配偶女神で破壊する力を司るドゥルガーは、イシュタル同様、ライオンに乗る姿で描かれることが多い。こうした仏教やヒンドゥー教の守護ライオン像は、南は東南アジア、北はネパール、中国、朝鮮にも認められ、日本にまで到来したと考えられる。

このように、王権や神々、黄泉の世界を守る存在としてのライオンのイメージは、世界的な広がりを受け入れられてきた。そのイメージには継続性が認められるが、地域によって変容している面もあり、それぞれの文化の違いを浮き出させるものとなっている。文化接触の興味深い例だといえるであろう。

Ⅱ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。また下線部①～⑤について以下の設問に答えなさい。

トマトやジャガイモなど、ヨーロッパの食文化になくてはならない食材のいくつかは、アメリカ大陸原産である。洋風の菓子やデザートに欠かせないチョコレート原料であるカカオの原産地も、メソアメリカか西アマゾンの熱帯低地であると考えられている。ヨーロッパ人が初めてカカオを目にしたのは、コロンブスの4度目の航海の際、マヤ人の大きな交易用カヌーに遭遇したときのことだとされる。コロンブスはフィレンツェ人（ A ）の地球球体説を信じて西回りルートでのアジア到達を企て、ヨーロッパ人として初めてアメリカに到達したものの、それをインドの一部であると考えた。4度目の航海の直前には、①ポルトガル王室から援助を受けたヴァスコ＝ダ＝ガマがアフリカを回ってインドに到達していた。コロンブスは自らの到達した土地がアジアだということを証明できなかったばかりか、期待した黄金を持ち帰ることもできず、先住民に対する残虐な行為を批判されて、4度目の航海から帰還するとまもなく、失意のうちに世を去った。ヨーロッパ人にとって、アメリカという「新世界」の発見は、それまでの世界観や、流通や生産のシステムを根本から変える大革命をもたらしたが、同地の先住民にとっては、征服者による虐殺と支配、ヨーロッパから持ち込まれた疫病による大量死など、過酷な歴史の幕を開くものだった。

スペイン人に征服される以前のメソアメリカにおいて、カカオ豆は貨幣としても使われる高価なもので、口にすることを許されたのは、皇帝など高貴な身分の者や戦士だけだった。1519年に現在のキューバ島を出帆し、1521年にアステカ帝国の都（ B ）を征服したエルナン・コルテスは、スペイン王（ C ）に5通の報告書を送り、行軍の様子を伝えている。その中にはアステカの皇帝モンテスマから金の皿や衣類とともにカカオを贈られたことと、これが飲み物であり、貨幣としても珍重されていることが記されている。当時のカカオの飲み方とは、カカオ豆の粉から作ったペーストに、唐辛子やアチョーテという食紅と、この地域の主食である（ D ）の粉などを混ぜて、水を入れて泡立てるというもので、祭儀の中でも使われた。現在のチョコレートやココアからはほど遠く、「まるで豚の飲み物のようだ」という記述も残っている。

さて、メソアメリカでカカオの栽培が始まったのはヨーロッパ人の到達よりもはるかに古く、炭化した豆や、カカオ豆をすりつぶす様子が描かれた土器など、多くの考古学資料から判断すると、紀元前までさかのぼることができると考えられる。紀元前1000年以前に生まれた（ E ）文明は、巨大人面彫刻やジャガー神を中心とする複雑な信仰、絵文字や暦を持っていたことなどから、メソアメリカの母なる文明と言われるが、この文明においてすでにカカオが栽培されていたと指摘する研究者もいる。同様に、紀元前1000年以前に土器を持つ定住生活を始めたマヤ人は、4世紀から14世紀に都市文明を開花させ、（ F ）半島北部のチチェン・イツァなど、すぐれた階段状のピラミッド建築

を残している。それらの遺跡からも、カカオの装飾が付いた多くの土器の他、カカオを表すと思われる絵文字の描かれた石碑などが出土している。

スペイン人による征服時にはごく限られた者しか飲むことのできなかったカカオだが、16世紀の半ばを過ぎると、カカオが持っていた特別な意味が薄れるとともに、生産量が上がって、次第に広い階層の人々の口に入るようになった。また砂糖やバニラ、胡椒やシナモンなどを入れ、温かくして飲む飲み方が考え出された。スペイン人は征服当初からアメリカ大陸にサトウキビを持ち込んで大規模に栽培を始めており、現地では砂糖が入手可能になると、スペイン人植民者や修道士は、この苦くて辛い飲み物に贅沢品の砂糖を入れ、ヨーロッパ風にアレンジして飲むようになったのである。こうして甘くてスパイスのきいたホットチョコレートは、まず ②アメリカ大陸の植民地に住むスペイン人を魅了し、17世紀になるとスペイン本国にとどまらず、③イタリア諸都市、オランダ、フランス、イギリスなどでも、上流階級のための嗜好品として受け入れられていった。フランスにこの飲み物が伝わったのは、スペイン王フェリペ3世の娘でフランス王（ G ）の妃となったアンヌ・ドートリッシュがスペインから持ち込んだのが最初であるとされており、王室間の結婚により宮廷文化が伝播した一例として興味深い。

カカオの需要が高まると、スペイン人はインディオの急激な人口減により衰退したメソアメリカの産地に代わり、現在のベネズエラあたりに多くのカカオ農園を開き、労働力として黒人奴隷を導入して、大規模な生産を行うようになった。スペイン人が ④フィリピンに持ち込んだカカオの苗は、オランダ人の手でジャワやスラウェシに広げられた。イギリス人は1655年に西インド諸島の（ H ）を獲得すると、そこでサトウキビとカカオのプランテーション栽培を始め、フランス人もサン＝ドマングで同じようにした。また、カカオをはじめとする植民地の産品は、ヨーロッパの経済活動の中心を、北イタリア諸都市と北ヨーロッパのハンザ同盟加盟都市から、大西洋沿岸都市に移した。中世からイギリス産の毛織物の取引などで繁栄していたフランドルのアントウェルペンには、⑤16世紀にスペイン帝国領になったこともあって、イギリス産毛織物と香辛料や銀といった植民地産品の中継貿易拠点として繁栄したが、（ I ）によってイベリア半島との取引が困難となり、1584年から翌年にかけてスペイン帝国軍による包囲と占領を受けて衰退した。代わって17世紀にはアムステルダムが西ヨーロッパの繁栄を誇るようになり、スペイン人でさえここでカカオを買わなければならないほどであったという。

その後チョコレートは、19世紀にオランダ人ヴァン＝ホーテンによる脂肪分を抜いたココアパウダーの発明、イギリスのチョコレート製造会社フライによる板チョコの開発、スイス人科学者アンリ・ネスレによるミルクチョコレートの発明、同じくスイス人ルドルフ・リンツによる滑らかなペーストを作る製法の発明など、多くの技術革新を経て、現在私たちが口にするような食物となった。カカオの産地も19世紀にはアフリカ大陸に広がり、現在では世界のカカオ豆のおよそ3分の2がアフリカで

生産されている。FAO（国連食糧農業機関）の最新の統計によるカカオ豆生産高トップ3は、かつてのヨーロッパ諸国による（ J ）取引の名残を国名に残すコートジボワール、オランダによってカカオ栽培が導入されたインドネシア、1957年にイギリス連邦内の自治領として独立したガーナの順となっている。

- ① 下線部①について、この結果可能になった香辛料の直接取引により繁栄したテージョ川河口の港市はどこか。
- ② 下線部②について、この中で植民地生まれの白人を何というか。
- ③ 下線部③について、この中で13世紀に十字軍を利用して発展を遂げたアドリア海北岸の港市はどこか。
- ④ 下線部④について、1898年までスペイン領土だったこの地で、宗主国への留学の後、圧政に苦しむフィリピンを題材とした小説を書き、独立運動に大きな影響を与えた人物は誰か。
- ⑤ 下線部⑤について、この頃のフランドルには、北方ルネサンスと呼ばれる人文主義の思想や芸術の繁栄が見られた。その中で「農民の踊り」に見られるように、同地の自然や農民生活を生き生きと写實的に描いた画風で知られる画家は誰か。

Ⅲ 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。

アフリカ南端のケープに歴史上初めて定住したヨーロッパ人は、オランダ東インド会社関係者とオランダ系移民だったが、イギリスがフランス革命中の混乱期にここを占領し、（ A ）議定書によってその領有が最終的に画定された。当初、イギリスにとってケープ植民地はアジアへの踏石としての価値しかもっていなかったもので、投資も最小限に抑えられていた。しかし、1820年、国内の失業対策としてケープ植民地に入植民を送り込んだことが、植民地の白人の社会を複雑にした。「1820年の入植民」と呼ばれた人々は、それ以前の入植者とは同化せず、かれらを「ブール（ボーア）」と呼んで区別し、他方、旧来の移民は自らを「アフリカーナー」と呼ぶようになった。

アフリカーナーは、新来の白人の入植にともなう「イギリス化」を嫌い、1830年代半ばから北部への大移動を開始した。これは後に（ B ）と呼ばれる。その結果、1850年代にオレンジ川とヴァール川にはさまれた地域にオレンジ自由国、ヴァール川の「向こう側」にトランスヴァール共和国が建国された。オレンジ自由国のキンバリーでダイヤモンドが発見されると、1871年にイギリスは武力を背景にこの地をケープ植民地に併合した。トランスヴァール共和国も1877年にイギリスによって併合された。その後、制限つきで一時的に独立を回復したが、1880年代半ばに大きな金脈が発見されると、カリフォルニアのゴールドラッシュに似た状況が生まれ、イギリスを筆頭に北米、オーストラリア、大陸ヨーロッパから膨大な数の白人が流入した。

トランスヴァールの金鉱の開発には多くの資本が流れ込んだが、なかでも、セシル・ローズらの「南アフリカ金鉱会社」は、ナポレオン戦争で巨富を得たシティの金融業者（ C ）から莫大な額の資金提供をうけて事業を始め、他を圧倒した。鉱山富豪となったローズは1890年にケープ植民地首相となり、南アフリカの北方への植民を奨励してイギリス帝国の権益確保に努めた。この地はのちに彼の名をとってローデシアとよばれたが、現在の国名は有名な遺跡の名前にちなんで（ D ）共和国である。

イギリス本国におけるローズの協力者はジョゼフ・チェンバレンで、彼が1895年に植民相に就任すると、イギリスによるトランスヴァール共和国への介入が強くなった。トランスヴァール共和国は、イギリス政府とローズによって領土拡張の試みを再三くじかれていた。同国のクリューガー大統領は、ドイツと提携して、ケープ植民地を経由しない鉄道ルートを開発しようとしたので、南アフリカをめぐってイギリスとドイツの対立が目立ってきた。しかし、1890年代半ばのイギリスにとって、南アフリカはまだ優先課題にはならなかった。イギリスは1898年の秋に、「中国の英雄」（ E ）将軍を見殺しにしたという非難を浴びながらも、スーダンのマフディーの乱を鎮圧した。その後、ファショダ事件も解決し、スーダン領有を確実にしたイギリスは、トランスヴァール共和国への内政干渉をきっかけとして、国内の好戦的な世論を刺激しつつ、ついに開戦に踏み切る。

戦争は、イギリスにとっては（ F ）戦争以来の長期戦になった。議会ではチェンバレンと軍需

産業との関係が追求され、国内にも厭戦気分が蔓延した。第二次世界大戦中に首相になる（ G ）は、従軍記者として戦地におもむき、敵軍に捕われたのちに脱走したことで国民的英雄になったのだが、戦争中にイギリスが対ゲリラ策としておこなった焦土作戦を「卑しむべき暴挙」と書いた。2年半以上の時間と莫大な戦費、45万人の兵力を費やして、ついに講和条約が（ H ）年に結ばれ、イギリスはトランスヴァール共和国とオレンジ自由国の領有権を獲得し、1910年に南アフリカ連邦という名称で帝国の自治州とした。

この戦争はその後の国際政治に大きな影響を与えた。戦争の長期化はイギリス陸軍の脆弱性をあらわにし、ドイツは（ I ）提督のもとで大規模な艦隊建造計画に着手して、イギリスの軍事的優位を脅かし始めた。また、世界経済においてイギリス資本主義が占めてきた優越的地位にも、かげりが見え始めていた。この戦争にともなって軍事費が膨張し、その赤字を補填するためにとられた輸入穀物への課税政策は、ふたたび、自由貿易か保護貿易かをめぐっての政治的対立を招いた。このような状況のなかで、イギリスはそれまでの孤立政策を放棄して、軍事・外交上のパートナーを求めることになった。日本との同盟条約の締結が、上記の講和条約と同じ年に結ばれていることもこの間の事情を説明する。また、この講和条約の条項には、黒人やインド系の住民の参政権や人権の剥奪を予想させる内容が含まれており、1948年以後法制化された人種隔離政策＝（ J ）の源泉がすでにここに見られる。

IV 以下の文章を読み、空欄（ A ）～（ J ）に最も適切な語句を記入しなさい。また、下線部①～⑤に関連した設問に答えなさい。

東南アジアでは交易の拠点として、河川や海岸に港を持つ多くの港市国家が発達した。紀元1世紀から2世紀のメコン川デルタ地帯では、おそらく南アジア語系の（ A ）人が建てた国がインドや中国との交易で栄えた。彼らは現地の民族とインドからの移住者の間に生まれた人びとである。①この王国のオケオはタイ湾に面した中継貿易港であったが、その遺跡は第二次世界大戦中に発掘され、ヒンドゥー教の神像、サンスクリット語が刻まれた錫板や指輪、漢代の銅鏡のほか、ローマ皇帝アントニウス・ピウスやマルクス・アウレリウス時代の（ B ）が出土した。かつて、この港から王都へ通じていた運河を通して外国からの交易品が王都へ運ばれたようである。

この王国は4世紀から5世紀に急速にインド文化を摂取したが、その背景には中国との関係が考えられる。中国では4世紀以降の②江南の開発にともない、都市には仏教を基礎にした華麗な貴族文化が発達した。そのことによりインドシナ半島内陸部で産出される香料・香木への需要が中国で高まったことが、東南アジア地域の諸国からの朝貢が増えたことにつながったともみなされる。香料をはじめとする産物の集荷によって、経済的政治的な支配権の確立を目指した東南アジアの王権が、朝貢に用いる産物を後背地から集荷するためには広い領域支配を正当化する根拠が必要であった。そのために、権威の源泉としてインド文化を取り込んだとの見方もある。なお、中国からの輸出品としての絹織物や工芸品は東南アジアでも消費されたが、そこを経由してインドや西アジアへも輸出され、港市国家のインド化をますます進めた。

こうしたインド文化の摂取および中国の政治的外交的な影響は、東南アジアの他の地域でも見られる。インドシナ半島東岸に面した地域で古代から17世紀まで続いた（ C ）王国は、2世紀末まで中国の支配に抵抗して国を建てたとされ、中国では林邑と呼ばれた。しかし、3世紀末までにはインド文化を摂取してその影響を強く受けた社会を成立させた。残されているサンスクリット碑文によれば、その後にはシヴァ神を祀る神殿が建造されるなど、インド風の王国であったことが知られる。その後には西アジアと南中国を結ぶ中継貿易を行ったが、中国やジャワ島の王朝からしばしば圧迫・侵略を受けた。このようにインドシナ半島部では、交易および政治的外交的な関係を伴う文化伝播によって、インドと中国双方からの影響を受けた王国の盛衰をみてきた。

同じ東南アジアでも島嶼部では、交易と文化の伝播はどのように展開したであろうか。マレー系民族によって7世紀頃にスマトラ島に樹立されたシュリーヴィジャヤ王国は、海上交通の要衝である（ D ）を中心として繁栄した港市国家であった。7世紀末にこの国を訪れた中国人僧の（ E ）は、当地に伝えられていた大乘仏教の隆盛を伝えている。この僧は671年に広州を発ち、この国に滞在してサンスクリット語を学んだ後に、インドへ渡航してナーランダー僧院で学んだ。この僧が中国への帰途に、この王国で書いた4巻の旅行記が『南海寄帰内法伝』である。この王国は③唐に朝貢し

ており、朝貢品を獲得するために、香料生産地に近いマラッカ海峡を支配することに強い関心を持っていた。そして征服地の住民に服従を強制するために、ヒンドゥー教の飲水呪術を用いたらしいことが記された石碑が残っている。

同じマレー系民族により8世紀後半以降にジャワ島東部に建てられたとされるシャイレンドラ王朝は、シュリーヴィジャヤ王国を継承したとも言われ、仏教を保護して有名な寺院建造物である（ F ）を造営した。この王朝はジャワ島、スマトラ島、マレー半島の交易網を支配し、さらに唐がヴェトナム北部に設置した統治機関である交州大総管府を襲撃したと伝えられる。なお、唐のこの機関は679年に（ G ）と改称された。

マレー半島では、14世紀以降にマラッカ（ムラカ）王国が海上交易によって栄えた。この王国は農業生産力が低いため、インドシナ半島にある（ H ）王朝からその糧食を輸入していた。マラッカが依存していたその国は港市国家であったが、後背地の森林地帯で採れる豊富な交易品の集積地であったことに加え、自国における浮き稲栽培による米を主要な輸出品としていた点に特殊性が認められる。マラッカは、その国の経済的影響力や軍事力によって侵攻される恐怖から脱するために、中国の威力を利用した。マラッカが明へ朝貢した直後に（ I ）の艦隊が訪れているのはそれを物語っている。マラッカが明の属領となったことが記された碑ができて以降は、外国勢力の侵攻に怯えることはなくなった。他方、明にとってもマラッカとの関係は、東南アジアでの勢力を広げる良い機会であったと言える。王朝初期からの海禁令によって、朝廷には東南アジアの産物が民間人を通じては集まらなくなっていたので、王朝が独占的に実施する^④貿易船隊が途中で寄港する地としてマラッカは好都合であった。

そのマラッカでは15世紀半ばに王がイスラームに改宗して、東南アジアにおける^⑤イスラーム伝播に大きな影響を与えたことはよく知られる。イスラームは交易ルートに沿って広まり、商人が伝えたイスラームを受け入れた王国が成立する。13世紀末にスマトラ島に初めてイスラームが伝えられた後、15世紀以降には島嶼部ではいくつものイスラーム王国が栄えた。アチェ、マタラム、バンテンなどはその例である。ジャワ島で13世紀末から16世紀前半まで、島嶼部の他の港市国家を制圧して勢力を拡大して栄えたヒンドゥー王国（ J ）があったが、その王国が滅びた原因のひとつには、15世紀後半からのイスラーム勢力の進出があった。

- ① この王国を指して中国の書物において使われた呼称は何か。漢字で答えなさい。
- ② この頃の江南の開発にともなって、南朝の都が置かれたのはどこか。現在の都市名を漢字で答えなさい。
- ③ アラブやイランのムスリム商人が航海によって中国沿岸に姿を現したのは8世紀であったが、その当時の貿易港であった広州や泉州には外国人居留地があった。それは何と呼ばれたか、漢字で書きなさい。
- ④ 空欄（ I ）の艦隊でも使用され、ムスリム商人がインド洋交易で使用した帆船に対比されることがある中国の大型帆船は何と呼ばれたか。
- ⑤ 15世紀から16世紀にかけて、イスラームの聖者がジャワ島などを訪れることで、商人層以外にも広く信仰されるようになったイスラームの宗教運動は何と呼ばれるか。